

審査の結果の要旨

氏名 豊川 斎赫

本論は1950年代から世界的な建築家として活躍し、戦後日本の建築や都市のあり方を一貫してリードしてきた丹下健三が東京大学在職時代に教育・研究活動を行った丹下研究室に関する研究である。従来、丹下そのものに対する研究は一定の蓄積があるが、丹下研究室の歴代構成メンバーを対象とする研究は皆無であり、本研究がその嚆矢となるものである。

本論はこうした丹下を取り巻くさまざまな人々を群像として捉え、そこから浮かび上がる新たな丹下健三像の構築を試みている。具体的には丹下健三に関する著作・論文・インタビュー記事などはもとより、丹下研究室に所属した歴代のメンバーの卒業論文、修士論文、博士論文を基礎的な資料とし、さらに可能なかぎり多くのメンバーに対するインタビューを実施し、その全体像にアプローチしている。

論文は大きく分けてⅢ篇からなる。第Ⅰ篇「アジアに於けるアテネ憲章の実践」は4つの章から構成される。すなわち、第一章「丹下研究室における国土計画論：総力戦下の生産力と全国総合開発計画」では丹下研究室OBの下河辺淳、大林順一郎の経済安定本部での展開を丹下研究室での理論形成と関係づけて、全国総合開発計画が丹下研究室における研究活動と密接な関係にあったことを跡づける。

第二章「丹下研究室における住宅経済論：総力戦下の再生産と標準生計費」では、戦後の住宅政策における基礎部分をなす「現実的標準生計費」などの住宅経済論について、丹下研究室が深い関心をよせていた事実を発掘している。

第三章「丹下研究室における「都市のコア」と「建築のコア」：都市と建築の有機的総合」は、丹下の建築論・都市論あるいは実作の中心をなす「コア」について、総力戦下の都市の圏域分析から説き起こし、人口統計学・都市地理学・都市計画の分野を広く渉猟したうえで、丹下の理論が構築されていくプロセスが示されている。

第四章「丹下研究室の観光＝厚生論：総力戦から高度経済成長に至るリクリエーションの変遷」は、戦後の不安定な時期からようやく経済的に立ち直った日本の次なる課題として浮上してきたリクリエーション理論について、丹下研究室は早くから独自に着目していたが、一定の限界を露呈していたことを指摘している。

続く第Ⅱ篇「「衛生陶器」を超える冒険性の諸相」は丹下の創作活動の思想的背景を探るもので、次の3つの章からなる。

第五章「丹下健三の西洋哲学論：「ミケランジェロ頌」から空間論へ」は、戦前の丹下の「ミケランジェロ頌」から戦後の「象徴論」に至る思想形成について、丹下が沈潜していたとみられる美学・哲学の諸思想を洗い直し、とりわけ立原道造らと同様、19世紀ドイツ・ロマン派の芸術論・観念論に深く傾倒

していたこと、そしてそれは丹下の代表作である代々木国立屋内総合競技場および東京キャセドラルの空間に投影されている可能性があることを述べている。

第六章「丹下健三の伝統論と丹下研究室の創作方法論：慰霊、庭園、モデュロール」は、戦後の丹下を取り扱っている。丹下は確信的な唯物論者であって、丹下の伝統論は上部構造、下部構造という明快な枠組みによって形成された。本章ではこうした伝統論が慰霊、庭園、モデュロールへと昇華されてゆく過程を追う。とりわけモデュロールは丹下研の共通言語として定着していた事実を発掘している。

第七章「丹下研究室とエンジニアの協働論：50年代の意匠、構造、設備の自立と連関」は、一転して丹下研の技術論と意匠論の関連をみる。丹下は構造や設備の自立性を認めつつも、それらの有機的な連関をつねに頭に描いており、丹下研究室もまた丹下のそうした考えを共有していた。丹下研究室の実質的なマネジメントを行っていた浅田孝の存在がこうした協働に欠かせなかったことが指摘されている。

第Ⅲ篇「諸技術・諸情報の統合術」は、上記の2篇の考察を前提に具体的な作品がどのようなプロセスで作られたかを明らかにしたものである。

第八章「実務作業から読み解く丹下健三の象徴論：国立屋内総合競技場と東京キャセドラル」は第五章で取り上げた2作品をより具体的な設計プロセス、実務作業を通して分析した章である。50年代の実験的創作を経て、完成度の高いシェル構造の名品が生まれるためには、丹下研で醸成された諸技術の統合があった。

第九章「丹下研究室とURTECの情報化社会論：国土開発地図と建築のアクティビティ」は1970年にURTEC、丹下研によってまとめられた『21世紀の日本』は、丹下研のひとつの総括とあってよく、戦後の国土全体の生産力分析と都市のモビリティに着目しつづけたグループの成果と限界が読み取れるという。

以上、本論は従来まったく明らかにされなかった丹下健三を取り巻く一群の専門家集団の多様な実践活動とその理論的背景をあらゆる角度から分析し、その全体像を浮き彫りにした力作である。丹下研究室の諸活動は戦後の日本の重要な部分を規定したわけで、そのような意味で本論は戦後日本建築・都市史のメインストリームを描いた作品ということもできる。

卒業論文、修士論文の精緻な分析や膨大なインタビューにもとづく論の構築には説得力があり、既往の丹下研究および戦後研究を大きく押し広げることに成功したと評価できる。よって、本論は博士（工学）の学位にふさわしい業績として認められる。